

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：34421

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K02322

研究課題名（和文）言語教育における単一言語主義から複言語主義への変容に関する比較史的研究

研究課題名（英文）A comparative historical study on the change from monolingualism to plurilingualism in language education

研究代表者

長谷川 精一（Hasegawa, Seiichi）

相愛大学・人文学部・教授

研究者番号：40269824

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日、仏、アラブ地域における複言語主義への変化について考察した。アラブ地域では、アラビア語の多面的な使用実態に着目し、アラビア語話者相互、及び、アラビア語話者と外国人との間で、多様な意味をもつコード・スイッチが行われるという複言語状態が生じる可能性が示された。フランスでは、かつての標準フランス語単一言語主義から複言語主義への変化がみられ、多くの小学校で「現代語」として英語が選択されているが、中等教育段階以降は第二外国語の教育が実施され、英語偏重の危険性は日本よりも低い。日本では、日本語単一言語主義から英語偏重の教育政策により日・英二言語が重視されるが、複言語主義への変化は進んでいない。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、日本、フランス、アラブ地域という3つの地域に関する考察・調査を相互検討する《三角測量》の方法により、言語に関する現代的な変化について、単一言語主義から複言語主義への変容という視点から、検討したものである。本研究では、言語を既成のシステムとしてではなく、言語プラクティス（言語行動）としてとらえ、日本、フランスにおいては、国語としての日本語、フランス語と国際語としての英語との関係を、また、アラブ地域においては、地域内の広域語としてのアラビア語の構造変化や国際語としての英語との関係を視野に入れて、各地域での近代から後期近代への言語教育の歴史的変容を比較考察することを目的とした。

研究成果の概要（英文）：In this study, we consider about the change to plurilingualism in Japan, France, and arab region. On arab region, we paid attention to pluralistic actual usage of Arabic. Possibility of occurrence of plurilingual state various code switches between Arabic speakers, or between Arabic speakers and foreign language speaker has shown. In France, the change from monolingualism (standard French only) to plurilingualism. In many elementary schools, English is selected as modern language, but The risk of overemphasizing English is lower than in Japan. In Japan, Japanese and English are considered important by national education policy of Japanese. Change towards plurilingualism is not progressing.

研究分野：教育史

キーワード：単一言語主義 複言語主義

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

同一のメンバーによる4回の共同研究をさらに展開し、様々な地域語を母語とする人々が、言語的差異と接する多言語状況において、どのような自分にあった環境を構築して環境と調和しようとしているかについて検討を試みた。

2. 研究の目的

本研究は、多言語環境の下での言語教育に関して、単一言語主義から複言語主義への変容という視点から、新たな比較教育史を追究した。

3. 研究の方法

本研究は、日本、フランス、アラブ地域という3つの地域に関する考察・調査を相互に検討する《三角測量》の方法を用いた。

4. 研究成果

<フランス>

フランスの小学校では、2008年からフランス語に加えて 現代語 (langues vivantes) として英語・スペイン語・ドイツ語・イタリア語・ポルトガル語・ロシア語・アラビア語・中国語の中から1言語を選択して教えるようになり、この結果90%を超える小学校で英語が学ばれている状況である。現代語教育の成果は十分に検証されうる段階にはまだないが、今後、現状では何が期待され、懸念されているかを、19世紀以降に公教育が制度化された過程で言語教育が果たしてきた役割の変化と照らし合わせながら考察していきたい。

言語教育は、19世紀の近代公教育制度の形成過程で、初等段階は標準フランス語単一主義で行われたが、中・高等段階は18世紀までのラテン語単一主義がフランス語の導入により複言語主義へ転換され19世紀末には英語も加わっていった。この状況が今日では初等段階にも共通するようになり、公教育全体が複言語主義で行われていると見なせる。近年の言語教育の成果は、教育統計の数値だけではなく、社会生活や政治文化の変容を探る研究からも考察する必要がある。

今世紀、フランスの公教育制度における言語教育は、欧州評議会が20世紀後半以降に提唱してきた複言語主義の理念と方策に沿って進められてきた。その結果、2008年度以来、初等段階でも、フランス語(国語)教育に加えて、現代語として、制度上は英語を含む8言語からの選択が可能とされていながら、実際にはほとんどの学校で英語教育が行われるようになっている。この状況には、一見、近年の日本との類似も指摘できよう。

しかし、フランスでは中等段階から第二外国語の教育が行われており、複言語主義を掲げる下で英語のみが偏重される皮肉な危険性は日本よりも低くなっている。フランスに関する今後の研究課題は、複言語主義によって英語教育の目標も母語話者レベルの能力ではなく、学習者の日常生活に必要な運用能力の育成へ転換されていく過程で、個々の学校現場でいかなる実践が試みられ、かつ、制度全体での教育成果がいかに評価されるかである。

フランスの近代学校制度における言語教育は、その制度構築に着手された革命期以来、19世紀を通じて、初等段階で国家語すなわちフランス語の指導のみを排他的に行う 単一言語主義 によって展開された。全国民を対象に標準フランス語教育が徹底される下で、国内各地の方言やフランス語と異なる地域言語は価値を貶められ、例えば、ブルターニュ地方のブレイス語のように、話者の激減により継承が危ぶまれた地域言語もあった。

ただし、中・高等段階では、20世紀前半までフランス語以上に古典語すなわちラテン語の教育が威信を保ち続けていた。したがって、フランス近代学校制度の言語教育が、すべて 単一言語主義 に覆い尽くされていたのではない。そもそも前近代からヨーロッパの知的エリートにとって、言語教育とはラテ

ン語およびギリシア語という古典語教育だった。言語教育における 複言語主義 的要素は、そうした背景からも考察する必要がある。

20 世紀後半からフランスでは地域言語を保護する政策が始まり、1980 年代以降は国内少数者の言語と文化を尊重する政策が積極的に推進された。また、フランスは対外的にも多言語主義を掲げて、ヨーロッパ連合諸国へ初等教育段階から現代語の二つの言語を必修科目にすることを提唱し、1995 年度には自国の全小中学校で外国語入門の授業を導入した。

こうしてフランス学校制度の言語教育は初等から高等段階まで 複言語主義 となった。とはいえ今日のフランスでも、住民が「市民」としての権利を行使し、かつ、義務を果たしつつ生活を営むには、フランス語の習得が不可欠である。このため義務教育によるフランス語習得が保障されると同時に、移民やその子どもたちに対しては、それぞれの母語習得の教育も提供されるように努められている。この現状は、近代の言語教育がもたらした負の遺産に対する反省と、複言語主義の効果をめぐる新たな知見によると言えよう。

<アラブ地域>

2018 年度には、中東地域のマジョリティであるアラビア語とアラブ・アイデンティティの関係に関する資料収集を行った。アラビア語をめぐる社会統合に関しては、公用語（標準語）としてのアラビア語（フスハー）と口語（方言）としてのアラビア語の二重構造に注目した。調査から、スレイマーンのコードスイッチを複数言語主義の前段階とみることの可能性に注目した。他方、新たな外国語の受容を研究する前提として、中東・アラブにおける外国語の位置づけを検討した。植民地化の経験から、政府の政策やとくにリベラル系・左派系の知識人の言説として、脱外国語（脱フランス語（マグレブ諸国の場合）、脱英語（エジプトなど））と、アラビア語使用の推進（アラビア語化政策）が重視されてきたことに注目した。

2019 年度には、アラビア語をめぐる特殊状況の理解、外国語（主に英語教育）の受容、アラブ諸国におけるマイノリティ言語（チェルケス、コプト、アルメニア、クルド等）とアラビア語の関係性に注目した。 に関してはフスハーとアーンミーヤの階層的関係と「棲み分け」（同一言語内の diglossia）の問題とともに、両者の中間形態としての知識人のアラビア語（'ilmiyya、各地のアラブ識者間のコミュニケーションに使用する科学的アラビア語）、若者の使用するアラビア語（会話や SNS 上のやり取りでも使用）の関係性に注目して調査した。

2020 年度には、2019 年度の 3 つの注目点の再検討整理を行った。とくに については、複数のマイノリティ言語話者とアラビア語話者の関係性に研究の資料を調査した。以上の 3 局面に注目して、アラブ社会の複言語主義の可能性について考察することの重要性を認識したが、さらに今後の研究の中で、（1）－（2）（→「局面 α」：たとえば植民地下のエリート層（英・仏語使用）のアラビア語）、（2）－（3）（→「局面 β」：たとえば英語で生活する湾岸アジア人労働者）、（3）－（1）（「局面 γ」：アラブ諸国のマイノリティ言語話者中のエリートによるフスハー使用）のような複合的な現実に注目することも必要であるとの認識に至った。

2022 年度には、言語教育をめぐる社会変化に向けては、diglossia の研究についての文献を調査した。アラビア語における diglossia については、年を追うごとに中東内外を問わず量的にも・質的にも研究の深化がみられる。中東内部においては、アラブ人研究者がアラブナショナリズムの直接的・間接的な研究への影響から脱却しつつあり、それが研究の新たな局面をもたらしていること、域外においては在外アラブ人研究者の増加や十分に現地体験を積んだ外国人研究者の増加が、新たな研究アプローチの背景にある。たとえば、バダウィ - のエジプトにおけるアラビア語の diglossia の紹介は、単一的であったアラビア語研究に対し複眼的な認識へのヒントとなるものであり、さらに中東アラブ諸国における複言語問題への橋渡しとなる可能性もあると考える。それによるアラビア語の新たな分類は、1.古典アラビア語、2.現代標準アラビア語、3.知識人による口語、4.識字者による口語、5.非識字者による口語となっている。報告者もこれまでの共同研究の中で上記 3 のカテゴリーについて現地の識者から指摘を受けて今後の研究に反映させたいと考えていたが、包括的な分類の中での議論については今回の文献調査で初め

て認識した次第である。このようなアラビア語の多面的な特性の理解とともに、さらにグローバル化による話者の生活環境や言語教育状況の流動化が一時的なものでなく、アラビア語自体の位相を大きく変化させつつあるとの認識を得た。

2023年度には、中東における主要言語としてのアラビア語の例外的状況の現出に注目し、イスラエル（ヘブライ語対アラビア語）と UAE（外国語とアラビア語）のケースに注目した。さらに、UAE の言語状況から、かつての植民地言語でありつつ、グローバル化のなかのコミュニケーションツールとしての英語の位相と新たな可能性についての認識を得た。

2024年1月には、Showman foundation 図書館における資料調査を実施した。調査資料中、中東における複言語主義全体にかかわる研究としては、ローゼンハウス（1）が包括的に主要言語であるアラビア語の置かれた現代の状況の変化について論じており、ここから重要な知見を得ることができた。すなわち同研究では、中東におけるアラビア語をめぐるバイリンガリズムやマルチリンガリズムをめぐる4つの言語能力（聞く、話す、読む、書く）やその役割の変化を整理している。とくにアラビア語における借用語使用の状況や diglossia やコード・スイッチングなどに注目した社会言語学的議論は、アラビア語と中東の社会変化とのかかわりを考察するうえで参考になった。

これまでの調査対象国に関しては、東アラブからはヨルダン、レバノン、北アフリカのモロッコ、エジプトにおける複言語主義の検討が中心だった。対象国選択の事情としては教育状況や文化的影響力や政治的安定度、何よりも言語状況をめぐる一定の研究蓄積の存在があった。今回の調査では加えて湾岸の UAE とイスラエルの複言語主義におけるバイリンガリズムについての興味深い資料を閲覧することができた。前者は著しい近代化とそれに伴う言語教育の変化と研究の蓄積が進んだこと、後者においてはパレスチナ問題をめぐる政治状況が言語教育の推進に適さないのではないかとこの事前の判断があった。しかし、実態としては政治的問題にもかかわらず一定の研究の蓄積があることが確認された。

まず UAE に関するジームンド（2）らの研究は、建国以来、先例のない経済・文化の発展を経験する同国の、国家体制の特徴が現在の言語状況と大きく結びつくことを指摘している。急速な近代化のために同国に暮らしている外国人は住民の85%に達し、この外国人の存在が同国の言語状況に大きく影響すること、すなわち公的空間における多言語の競合状態につながっているのであり、その中において英語が獲得した特別な優位性が指摘される。つまり、英語は競合する各言語の第二外国語、リンガフランカとしての地位を強化するのである。さらに注目すべき点は、大学生への調査では、アラビア語と英語の緊張関係が存在したものの、後者の優位性が目立っていること、それ以上に近年では外国語から「新たな母語」（ローカル化された英語）としての「湾岸英語」Gulf English が広がりつつあると指摘している。シンガポールにおけるいわゆるシングリッシュ Singlish を想起させる。

またイスラエルの言語状況に関しては、マジョリティである現代ヘブライ語話者と非ヨーロッパ系ユダヤ人移民の言語（出身地域の母語）とマイノリティとしてのアラビア語教育の実情も興味深い。スポルスキーの研究は、まずイスラエルのヨーロッパ・アジア・アフリカの交差地域という地理的条件に注目し、当地をめぐる度重なる権力闘争と4つの宗教の焦点（ユダヤ、キリスト、イスラーム、バハイーの中心）であることからくる複雑性と多言語性を指摘している（3）。いわゆる2000年前の「離散」以前の3言語主義 triglossia は、ヘブライ語、ユダヤ・アラム語、ギリシア語によるものであったが、それを受けて「離散」中のユダヤ人はヘブライ語（宗教・文学のことば）、ユダヤ語（イディッシュ語、またはユダヤ・フランス語、またはラディノ、あるいはパレスチナにおいてはユダヤ・アラビア語）そして非ユダヤ人に対しては共通の領土の言語を使用したことが、現在のイスラエルの多言語状況の根幹にあると説明している。ここで、宗教語としてのヘブライ語と生活語としてのユダヤ語の関係は、これまで報告者が注目してきたアラビア語のフスハーとアーンミーヤ関係に重ねると、特にアーンミーヤに相当するユダヤ・アラビア語はユダヤ人の言語的アイデンティティにおいては、非ユダヤ人ではなく、いわば身内の扱いであることが注目される。現代のイスラエルにおいてはそれが、アラビア語が明らかに非ユダヤ人の枠として位置づけられること（あるいはユダヤ・アラビア語自体が消滅する）を想起すると、政治状況の言語的アイデンティティ分断に影響する事例とみなすことができるだろう。

これまでの当該問題のテーマ調査に関しては、アラビア語のマジョリティ状況に対応する言語の多様

性をめぐる諸問題の調査が中心であったのに対し、2023年度はアラビア語をマイノリティとする地域の多言語状況についての資料に注目した（下記2020年度概要中の局面Bに関連）。今後は中東という枠組みで前者の研究と合わせて、多言語主義の問題の包括的考察に発展させていきたい。

（参考文献）

- (1) Judith Rosenhouse, “Bilingualism/Multilingualism in the Middle East and North Africa: A Focus on Cross-National and Diglossic Bilingualism/Multilingualism” in Tej K. Bhatia, William C. Ritchie, *The Handbook of Bilingualism and Multilingualism*, Wiley & Sons October 2012
- (2) Siemund, P., Al-Issa, A., Leimgruber, J.R.E., “Multilingualism and the role of English in the United Arab Emirates” in *World Englishes* 2021;40:191–204.
- (3) Spolsky, B., *Multilingualism in Israel*, Cambridge University Press, 2009

《総括》

研究期間全体を通して中心となったのが、中東アラブ諸国におけるアラビア語の使用実態であった。一般には、アラビア語は域内の統一的言語という理解が中心で、それに標準語と方言という二元性があることが付記されるにとどまっている。しかしながら、より厳密にアラビア語の使用について検討すると、それが多元的であり、どのアラビア語を使用するかが社会的な意味合いを持つ場合があることが分かった。

本研究のテーマである単一言語主義を一方の極とし、複言語主義の展開を他方の極とした場合、次のようなことが考えられる。すなわち、常態ではないが、アラビア語話者の間ではコードスイッチによって複言語状態が生じる場面がある。コードスイッチがアラビア語の多元性により生まれる言語間の対立や緊張の回避のための行動と想定した場合に、それは共生までには至らずとも、慣習として積み重なってきたと考えることができる。これは、フスハーとアーンミーヤ間の垂直な関係だけでなく、諸アーンミーヤ間の水平的な関係についても生じる可能性がある。

このような言語空間に、外国語を交えて考えた場合、外国人、アラビア語話者間に生じるコードスイッチは様々な意味を持ちうる。歴史的な植民地状況下と脱植民地状況下、そしてグローバル化進展下の現代のそれは、それぞれに異なった意味を持つ。宗主国の外国人が被支配国でアラビア語を使用する場合は、統治の必要上であることが多く、逆は支配関係の容認が前提となっており、垂直的な関係を反映している。脱植民地下では、外国人のそれは政治的対立回避の手段であり、アラビア語話者のそれは戦略的な対立回避の意味を持つだろう。現代のそれは、典型的には相互にビジネスのためのツールとしての意味をもつ（例外的にはアラビア語話者ではないムスリム間のコミュニケーションツールにさえなりうる）。

主要言語としてのアラビア語の多元性を理解し、他の地域語と外国語の受容について、グローバル化の深化による社会環境の変化がいかに言語局面に反映されているかを研究することが重要であるとの認識を得た。主要言語と外国語の歴史的関係の検討だけでなく、当該地域の複言語主義をめぐる多様性や流動性の理解のためには、diglossia、コードスイッチなどの社会言語学の知見を取り入れることの有用性を認識した。

<日本>

日本の言語教育、多言語状況に関して、高度成長期以降、現在に至るまでの時期に焦点を当てて概観した後、ニューカマーと呼ばれる南米日系人を中心とする外国人住民が多数居住する都市によって組織された外国人集住都市会議の会員都市の中から、静岡県磐田市、長野県上田市等に関して、言語教育と地域共生を目指す取り組みについて調査を行った。フランス、アラブ地域とは異なり、日本においては、増大する日本で働く外国人の場合を除いて、単一言語主義から複言語主義への変容が広く見られるとは言い難く、言語政策としても、日本語・英語のいわば「二言語主義」が示されている状況である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 北澤義之	4. 巻 2020年6月号
2. 論文標題 コラム「集団礼拝と感染症」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『改革者』労使研	6. 最初と最後の頁 51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北澤義之	4. 巻 2021年2月号
2. 論文標題 書評 未近浩太 『中東政治入門』ちくま新書	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『改革者』労使研	6. 最初と最後の頁 62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 Yoshioyuki Kitazawa
2. 発表標題 Diwan as a public space in Jordan
3. 学会等名 WOCMES Seville
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Yoshiyuki Kitazawa, Fu-Lai Tony Yu, Diana S. Kwan eds	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5. 総ページ数 412
3. 書名 Contemporary Issues in International Political Economy	

1. 著者名 北澤義之、岩崎えり奈編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 旬報社	5. 総ページ数 353
3. 書名 世界の社会福祉 第11巻	

1. 著者名 Yoshoyuki Kitazawa	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5. 総ページ数 428
3. 書名 Contemporary Issues in International Political Economy	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	越水 雄二 (Koshimizu Yuuji) (40293849)	同志社大学・社会学部・准教授 (34310)	
研究分担者	北澤 義之 (Kitazawa Yoshiyuki) (90257767)	京都産業大学・国際関係学部・教授 (34304)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------